

エディトリアル

本号の特集について

江面正幸

国立病院機構仙台医療センター

仙台医療センター医学雑誌編集長

(2021 年 12 月 16 日受稿、2021 年 12 月 16 日受理、連絡先：江面正幸・仙台医療センター 医学雑誌編集長)

本号では、第 75 回国立病院総合医学会（75 回国病学会）の開会特集を企画した。このような特集企画は本誌（以下 SMCJ）では初めてのことなので、経緯を説明するためエディトリアルを記載することにした。因みに、このエディトリアルも初の試みである。

第 11 巻の編集後記に、「和文誌（の存在意義）は学術的価値よりも読み物としての価値にシフトしつつある」と記載した。本号で 75 回国病学会の特集を組むのは、この流れを汲むものである。本号には拙筆の「仙台医療センター医学雑誌が近年行った編集体制の改革について」という短報も掲載されている。これの主旨は SMCJ を年 3 回発行にすることにより多くのメリットがあったということであるが、本特集掲載もこれの恩恵である。というのも、年 1 回発行では掲載が次の 76 回国病学会が終了したあとというような事態も考えられ、学会報告の掲載場所としては適していなかったからである。そもそも国立病院総合医学会の開催報告を病院誌で掲載するというのも私はこれまで目にすることがなく、初めてかどうかはわからないが、あまり類をみない試みであることは間違いないであろう。この特集が組めたのは筆者が推進してきた SMCJ の編集改革の賜物ではないかと考えている。

75 回国病学会で筆者自身で最も印象に残っているのはシンポジウムの事前収録である。筆者は自施設開催でもあり、脳卒に関連のシンポジウムの発案者となり座長も務めることになった。8 月中旬に連

絡があり、シンポジウムは全ての座長、演者が 9 月中のどこかの時点で 2 時間程度の時間を共有し、オンライン開催と同じように実際のシンポジウムを行い、その録画画像をオンデマンドで放映するという形式にするとのことであった。このような形式はオンライン開催が多くなってからよくあるパターンであったが、驚いたのは収録時間の調整、実際の収録は全て座長がやるように、という連絡だったのである。このような形式は未だ経験したことがなく、もう少しイベント会社が協力してくれないのか聞いてみたが相手にされない感じだった。仕方なく時間無制限の無料版でない正規の zoom を購入し、時間が迫っていたためシンポジウムメンバーの時間調整までは行ったが、この収録日前に学会の準備委員会があった。幸い準備委員会のメンバーにも入っていたので経緯について質問したところ、「収録の調整や収録そのものをイベント会社がやるとお金がかかります。そこをセーブするため今回はイベント会社は入りません」とのことだった。筆者は更に食いつき、「シンポジウムは学会の根幹である。根幹のシンポジウムの経費を削るのは本末転倒ではないか。いくらお金がかかってもシンポジウムはきちんと収録するのが学会およびイベント会社の責務ではないか」と演説して事務とイベント会社を説得できた。おかげで私の担当のシンポジウムは無事イベント会社を入れての収録ができた。改めて、学会の根幹を確認させられたエピソードであった。